

# わたしの教育実践 ～日本の大学教育～

ジョン・ポッター \*

## はじめに

小論は、日本の大学で担当したある教育学の授業を、個人的に総括したものである。この授業では、教育に関する進歩主義の考え、およびラディカルな考えについて、学生に理解してもらおうと思ったのだが、授業に対する学生自身の評価も紹介しておいた。

## 概要

わたしはかつてサマーヒル校で教えていたの（1980年から1982年まで、ちょうど2年間）、日本では、イナ・ニールがまだサマーヒル校の運営にかかわっていた頃の学校はどんな風であったのかと、時々質問されることがある。また、1993年にオハイオ州アンティオーク大学の文学修士課程を修了したが、ここでの主要な研究は「オルタナティブ・エジュケーション」についてであり、ことに修士論文のなかで議論をつきつめたのは、日本におけるA・S・ニールの影響、特にサマーヒル校を「修正モデル」として、1992年に堀真一郎によって開設された、きのくに子どもの村に対する影響についてであった。この研究を進めていたちょうどその時、関西大学の教育学の教授をしていた二人の友人から、かれらが出版しようとしている本の1章を担当しないかと打診された。修士論文の第2章は日本の教育に対する批判的考察であったが、この部分はこの申し出に応じるために書き直し、

その後『学校という交差点』（Crossroads for Schoolsという英文の副題がつけられていた。）という本に、他の11のエッセーと共に収録され、出版された。加えてこの二人から、1995年から1996年の間、関西大学の教育学のある授業を担当しないかという申し出を受けた。この授業は1年間のコースで、学生たちに教育哲学についてなにがしかを教授し、かねて著名な教育学者（できればヨーロッパの教育学者）の代表的な著作を英語で読むという、訓練を目的とした授業でもあった。

日本には1000校あまりの4年制および短期大学がある。大学生は4年間、短期大学の学生は2年間在籍する。1990年初頭には499の大学があった。これらの大学は3種類に区分される。国の経営になる「国立大学」、都道府県、市、あるいは地方当局によって管理されている「公立大学」、そして私人の経営になる「私立大学」である。いわゆる「トップ」のいくつかの私立大学を除いて、国立大学が上位校とみなされているが、大多数の大学は私立大学である（1990年現在で364校）。

大阪市だけでも大阪何々大学という名の大学が15校もあるが、最も名声のある大学は国立の大阪大学であり、この他にたくさんの短期大学が存在する。これらのことから、大学や短期大学教育が、多くの人々の熱望の対象になっていることが容易に了解される。大学が増加したので、試験で決定される入学の困難さの程度に

\* John Potter氏は本学講師（教育学基礎講読担当）。本論文は“The Journal of Alternative Education”（Summer 1996, vol. X III No. 3 New York.）に掲載された。原題は、“EDUCATION IN A JAPANESE UNIVERSITY”尾崎ムゲン訳。

よって、大学の地位が非公式にランキングされるようになってきている。大学入試のための準備教育はそれ以下の学校のほとんどの時間を塞いでしまっているし、日本の子供が直面している「受験地獄」は非常に有名である。皮肉っぽくいえば、大学や短期大学にいったん入学してしまえば、高等教育に在籍する学生に対する社会の要求が非常に低いので、学生はなにがしかリラックスしても良いのだと、おうおう考えてしまうのである。学校での受験地獄と社会人として雇用されてからの勤勉さの間のこのすきまは、しばしば、－良い意味でも、悪い意味でも－日本社会では「大学天国」の時期と位置付けられるのである。

関西大学は私立大学であり、巨大な商業、産業都市である大阪市の郊外、吹田市にある。大学は1886年に関西法律学校として創設され、1905年に関西大学と改称された。中心部分は1922年に、吹田市の現在の広大な敷地に移転した。教育学科は文学部を構成する8学科の一つであり、心理学と教育学の二つの専修から構成されている。大学案内では学科の紹介にルソーが引用されるなど、環境は「リベラル」だとされている。関西大学は日本では非常に高い評価を得ている私立大学である。教育学科の卒業生は大学案内によると、「多数が教育や社会福祉関係の職場で働くことを選択し、さらにもう少し広範な民間企業、ことに情報産業部門にも多くの学生が就職している。」とある。(Kansai University; A Guide, 1994-1995. p. 24) 学部学生の総数はおよそ2万5000人である。また、オーストラリア、ベルギー、中国、アメリカ合衆国の諸大学、それにイギリスのパーミンガム大学との間に国際交流プログラムが結ばれている。関西大学は日本的基準からしても巨大大学である。

## 授 業

わたしの授業の目的は、欧米の教育学者を紹介することであった。かれらの論文のなかから重要な部分を選び出し、講読し、余裕があればディスカッションをするのである。この目的のための授業は2クラスあって、受講を必要としているおおよそ50人の学生が、わたしのクラスか、あるいは学科の常勤の日本人の教授が担当するもう1つのクラスを選択することになるとあらかじめ言われていた。わたしのような外国人がこの授業を担当するのも、また学生が教育に関する論文を英語で読み、できる限り英語でディスカッションすることを求められるのはじめてであるから、多分学生は脅えてしまって、わたしのクラスを選択するのはせいぜい10人以下、教えるにはちょうど良い規模の小グループになるだろうと思われていた。

わたしは、修士論文－「A・S・ニールとジョン・デューイ」－に関係する専門領域の研究を中心に、その他自分で必要と判断すれば何を加えても良いと言われた以外には、どのように教え、あるいは何を教えるかについて、完全に決定権を与えられていた。日本の大学の授業のごく一般的なスタイルは、教師が重々しく講義して、学生は試験に合格するために教師の言ったことをそのままノートする、というようである。わたしがなぜ非常勤講師として招かれたかというと、多分わたしの経歴が－サマーヒル校での経験と、ラディカルな思想についての学識を持っていること－、教育学科において、大学教育の将来の在り方をわずかでも変革するために、貴重なものになるだろうと判断されたからではないだろうか。履修要綱に載せた講義概要には、ニールとデューイの類似点と相違点を検討するとしておいた。ニールとデューイの先駆者に関しては、かれらから影響を受けた人々の場合と同様に、「ニールとデューイを、今世紀の進歩主義やラディカルな立場に立つ他

の教育学者と対比し比較する。」としておいた時間帯でできるだけふれようと思った。さらに加えて「ニールとデューイの影響を受けて拡大していった、学校や教育の現代的新局面」、あるいは「アリス・ミラーなど現代の思想家たち」といった話題にもふれようとした。これらすべてを22講時で行なおうというわけである。ともかく、古いものにしがみついて何もしないよりもやってみることだ、なにもかも試みしてみることだ、と考えていた。

日本では新学期は4月から始まる。授業が始まって、学生の数にまず驚かされた。わたしのクラスには25人もの学生が登録していた。せいぜい10人くらいだろうと思っていたのだが、彼らのうち22人は3年生で、残りの3人は4年生であった。ところが、履修学生のうち4人は最初の授業に出席したきり消えてしまった。残りの勇士たちは男性14人、女性7人で、全員教育学専修生であった。学生はこの授業を履修する前に、最低でも2年間教育学を学習してきたのであるが、ニールやデューイ、あるいはわたしを紹介しようとしていたその他の教育学者については、ほとんどなにも知らないと考えておくようにと、あらかじめアドバイスを受けていた。これが賢明なアドバイスであったことは後で分かった。

日本での非常勤講師歴はもう数年になり、これまで公立や私立大学、あるいは短期大学で教えてきた。しかし、これまでの経験は日本人学生に英語を教えるということであったから、こういった授業を担当するのはエキサイティングであり、またいささか緊張もしていた。これまで成人に教育学を教えたことはなかったし、また、わたしはほとんど日本語をしゃべれなかった。日本語で教育学の概念について議論することなどほとんど不可能だと思っていた。ただ教育学科のメンバーは、学生の英語の能力は多分大丈夫だろう、—授業の目的は、もちろん教育

学に関する文献を英語で読むことである。—もしやむを得ないならば、全部を英語でやればよいのだ、と勇気付けてくれた。しかし、これがまったくの向こう見ずであったことはすぐに分かった。書かれたものを理解する学生の能力はまあまあだったが、しかし聞くことと話すことにかけては、まったくお話にならず、その結果、授業はついには日本語と英語のチャンポンで進めざるを得なくなったのである。

授業は、あらかじめ選んでおいて、学生に読んできてもらった教育学者の英語の論文を2、3、教材にして、それをもとに組み立てた。資料を日本語に訳してもらい、—できればペアを組んだり、あるいはグループ作業として—最後にクラス全体で討論するのが常であった。できるだけ簡単に翻訳できるものを選んだのだが、それでも学生は四苦八苦していた。ディスカッションはきわめて困難な作業であったが、それは日本の学生がディスカッションしたり、自分の意見を他人の前で述べたりすることに不慣れであることからきていた。

#### 授業のあと書き留めておいたコメントを中心に

4月12日

最初の授業。授業の方針—学生に何を期待しているか—、英語と日本語で書いた紙片を渡した。教育について、何でも自分の意見を言うようにと学生を励まし、評価は次の三つの基準、つまり出席、レポート、およびテストで行なうと言っておいた。これは大学からの要請であった。（実際にはテストは行なわなかった。）ニールとデューイの本をあちこち読んで行く上で、次の2冊の本が役にたつからぜひ買っておくようにと、紙切れに書いて渡した。その本はニールの『新しいサマーヒル』(The New Summerhill)と、デューイの『経験と教育』

(Experience and Education) の2冊であった。(しかし実際には、わたしの知る限り、だれも、1冊も、買わなかった。) この授業での約束ごとは、他の大学のわたしの英語の授業よりもずっとゆるやかで、ずっと「自由」であったのだが、それはこの、いわゆる「良い」大学では、熱心で勤勉な学生が多いに違いないと思ったからである。(しかし少数の学生を除けば、この思いはまったく事実と違っていた。たとえば出席であるが、ほとんどの学生は来たり来なかったり、といった具合であった。)

学生に渡した「教育の目的」に関する資料には、抵抗すること、あるいは創造することが大切だ、という主張を集めておいた。これは上首尾であった。このあとの活動で、学生にニール、デューイ、そしてホーマー・レインの短い引用をいくつか読んでもらい、どれが誰のものか判断を求めた。ある学生は、一番印象に残ったのはニールの「子供が最初に学ばなければならないこと、それは抵抗ということである。」という文章だと語ってくれた。

4月19日

2回目の授業に新しい学生が参加してきた。まゆらである。熱心な教育学専修の学生で、この授業は必要単位ではないし、成績を出してもらわなくてもよいが、出席させてもらってもよいかと聞いてきた。彼女はこれまたなかなか熱心なまりという学生の友人であった。まりはこの2回の授業で前の方に席を占めていたが、そこにまゆらが加わった。男子学生と女子学生はそれぞれお互いを区別していて、教室が小さいのでお互いに完全に分離できないのに、それでも個人用の机が縦にならんでいる、その両側にわかれて、それぞれ席を占めていた。一般的に言えば、女子学生の方がずっと授業に積極的に参加しようとしていたが、男子学生の方ではごろろという学生が猛勉タイプの学生で、いつもカバンに教育書やたくさんノートの類をいっぱい

入れて出席していた。かれは25歳で、弟が名声のある京都大学に在籍していたので、家族からいつも「頑張れ」とプレッシャーをかけられていることが、あとで分かった。他の学生ではとしおはいつも静かで、受け身であった。かつみはおもしろい学生だったがよく寝ていた。そしておさむはこの授業では唯一、かなり上手に英語を話す学生であった。2回目の授業ではニールのプロフィールについて読み、かれ自身の文章をいくつか翻訳して、ニールやサマーヒル校について初歩的な知識を得た。

4月26日

ビデオ「ハッピーであることは一番大切なこと」(Being Happy is What Matters Most)を見た。このビデオはサマーヒル校についての25分もののビデオドキュメントで、1987年にイギリスのセントラルテレビで放映されたが、サマーヒル校がどんな学校であるか非常に良く紹介していた。ほとんどの学生はこのビデオに衝撃を受けたようだ。かつみはやはり寝ていた。もっとも、ヌードになってみんなが水浴するシーンはガバッと起きて見ていたが。

自分の意見を公表することをあまりに嫌がるので、わたし宛に質問/意見などを書いてもらい、授業の終わりに渡してもらうことを考えた。家に帰ってそれを翻訳し、簡単にでも回答を書かねばならぬということは大変な作業であったが、しかしこうすることがわたしには最良の途だと思われた。数人の学生が水浴について質問した他は、大多数の学生は子供の喫煙にショックを受け、ともかく全員がサマーヒル校には度胆を抜かれていた。ただまゆらはすでにサマーヒル校について知っていた。としおはサマーヒル校は「特別な学校」なのかと質問し、かつみは「自由すぎる」と考えたようだ。おさむはサマーヒル校の生徒は大人になった時「わがままほうだいの、自己中心主義的な人」になっているのではないかと考えた。用心深くではあるが、

女子学生はだいたいにおいて積極的な評価をしていた。

5月17日

質問／意見用紙への回答と、さらに新しい質問を受けた。学生の質問に答える時、ニールの主張や自由についての考えにかなり強く賛成しているわたし自身の意見をどの程度表に出したらよいものかと困惑する。しかし、できるだけ真正面から答え、学生の質問や意見に対してはっきりした回答を行なうことが、一番大事な、真実の議論を生む助けになるだろうと考える。いずれにしても、学生はわたしが以前サマーヒル校の教師をしていたことを知っているのだ。

5月24日

再度ニールについて。およびサマーヒル校と自治について。英語や日本語の文献を読みやすくするために、情景を簡単に紹介した音声つきの、サマーヒル校のミーティングに関するビデオを見た。そして『新しいサマーヒル』(The New Summerhill)のなかから、ミーティングや自己統治について、ニールの書いたものを若干読んだ。この2回目のビデオ観賞の後、自由についての学生の意見は少しだけではあるが寛容なものになった。男子学生と女子学生の違いについていえば、女子学生はどちらかといえば自由について耳を傾け、男子学生、ことにあまり勉強に関心がない学生の場合にはほとんどシンパシーを感じることはなかったようである。

5月31日

ニールの考えの基礎、次いでジョン・デューイ入門。まりが(彼女はいつも授業に遅刻してくる。)わたし自身の考え方はどうなっているのかと聞く。学生は、書くことでは少しは心を開くことができるのに、心を開いて議論したり、意見を言ったりすることがきわめて難しいようである。

6月7日

デューイを理解するのに四苦八苦する。『経

験と教育』によって、かれの経験概念について学ぶ。デューイの文章はニールの文章よりずっと理解が困難だ。学生が数人、珍しく出席した。つよしは4週間ぶりに出席し(遅刻して)、そしてすぐ眠った。としおは長期欠席のあと登場した。(しかし、まりとまゆらも今日はじめて欠席した。)授業で学生に何をしてもらうべきかについて見解を変えた。もしわたしが、文章を要約したり、日本語に翻訳したりして、学生に理解が可能なようにしさえすれば、学生はどうしてこのような難しい、うんざりするような英語を読む必要があるのだろうか。おさむは英語で、「あなたの授業は美しい」と言う。ごろうとこうへいは友人になったようだが、かれらは数少ない良心的な男子学生だ。

6月14日

デューイで苦しんだが、今日は、あらかじめ、理解を容易にするために、「(デューイの主張を)要約した用紙」を提供しておいた。しかしそれにしても、学生は、なぜ日本語ですらあらかじめ読んでおこうとしないのだろうか。まったく不思議だ。この授業の主たる目的は教育について学ぶことであって、英語を学ぶことではないはずなのだが。学生は気ままに出席している。たとえばとしおやかつみだ。ところが、かれらは自由主義教育に対して最も批判的なグループに所属しているのである。興味深い現象だ。まりは意外なほど静かだ。あとでその理由が分かった。授業の前に、教育学科のある教授が、わたしの授業に何も準備せずに出席していることでひどく彼女をとがめ、彼女が泣いてしまったというのである。しかし、学生に、デューイについてグループ・ディスカッションをするよう求めたときには、にこにこしていた。3つのグループでそれぞれ結論は割れてしまったが、男子学生は、学校は自分たちの学習に対する欲求を満たしてくれたと言い、女子学生はそうではなかったと言った。ただ関西大学につ

いては、これは双方とも意見が一致したのだが、授業がおもしろくないということであった。デューイに関する設問で、「教え込みが少ない」ことは望ましいことだという点について、男子学生は、デューイは間違っていると言い、女子学生は正しいと言う。ここで再び考えてしまうのであるが、男子学生は明らかに非理性的である。（あるいは、少なくとも保守的である。）今日の出席学生は11人であった。比較的静かであったが、はじめて本当の意味での議論が成立した。

6月21日

10人が出席。ほとんどが遅刻。この大学では、この種の事柄に関しては、ずいぶんましであるに違いないと予想していたので、出席や遅刻については、不幸にも始めから十分対策をたててこなかった。授業のあとまりと出会い、途中まで電車で一緒に帰った。ニールとデューイの引用について、おさむは情緒的な自由は「大した問題ではない」し、「教育とは何も関係ない」と考えている。ごろうが今日初めて休んだ。最後に、日本を訪問中のイギリス人教師、ジュリー・レッドパスさんについて説明し、来週ゲストとしてお招きし、楽しい時間を持つ予定だと予告しておく。彼女はイギリスの教育やその他彼女が教えてきたいいくつかの国の教育について、質問に答えてくれるだろう。

6月28日

ジュリーが来校した。教師としてギリシャ、タイ、日本で働き、またバルセロナのインターナショナル・スクールで働くため、短い期間ではあるがスペインへも行っているの、彼女はいろいろな国のことならについて各種の質問を受けることとなった。ほとんどの質問をおさむ、ごろう、まり、まゆらが行なった。1人の学生が、第1回目の授業以来初めて現われた。普通女子学生は男子学生よりもたくさん、（センスに富んだ）質問をする。この授業についても何

か触れてみてよ、と言ったが、誰も、何も言わなかった。2人の学生がネバダとニュージーランドに行ったことがあると発言した。

7月5日

出席学生13人。堀真一郎ときのくにに子どもの村を紹介したNHKのビデオを見て、そのあと堀のプロフィールを日本語で読んだ。ちょうどビデオが終わりかけた頃まりがやってきた。ところが、彼女はビデオをもう一度見たいと言う。アルバイトをしていて、その後友人と昼ごはんを食べていたのが遅刻の理由だと言うのである。学生が出て行ってしまってから、10分ほどビデオを見せた。また、今日は1人の学生が6週間の欠席の後、姿を見せた。彼が言うには、4年生なので就職活動に励んでいたとのことである。

9月29日

夏休み後の最初の授業。以前本腰を入れてインタビューした学習およびニールに関する堀真一郎の主張を、修士論文から採ってきて、2枚分訳した。

10月4日

きのくにに子どもの村について報道したテレビ番組のビデオを見て、さらにきのくにの子供が作った新しいビデオを見る。その後、堀の手になる2つの文書、「自由な子ども」(The Free Child)と「きのくにの活動」(Activities at Kinokuni)を読む。

10月11日

先週のビデオの続きで、学生(14人)にグループ・ディスカッションをしてもらって、きのくにとサマーヒルの相違点と類似点について「討論」してもらった。1人の学生が、きのくにに入学するには膨大な費用がかかるという理由で、きのくには「自由ではない」と痛烈な批判を書いている。あずみという日本人のサマーヒル校卒業生の文章をいくつか翻訳し、コメントを加えておいた。彼女の日本教育と日本社会に対する意見にはきわめて厳しいものがある。

たみおは、彼女の考えは良いが、しかし「ここにはこういった考えの女性は一人もいない」、と付け加える。おさむは（ニールが殺人罪で告訴されているオカルト集団のリーダー、麻原彰晃とまったく同じだと考えていたのだが）、あずみの考えをホロコーストになぞらえている。かれは、ニールは社会を破滅させようと考えているが、このような考えは自分の考えとかなり違い、「危険」であると感じている。男子学生と女子学生の意見では著しい相違がある。女子学生はものごとを広い社会的文脈で見たいこうとする。男子はごくわずかな学生だけが、ものごとを広い文脈で見ようとするにすぎない。おさむ（たいへん保守的なのだが）、ごろう、こうへいが、かろうじてそうである。

堀真一郎に読んでもらうため、学生の書いたコメントをいくつか送った。堀はたいへん失望したこと、そしてこれこそ「日本の教育の失敗」を明示している、と言ってよこした。

10月18日

2年前、きのくに子どもの村が開校する直前に堀がインタビューを受けて、20分ものラジオ番組になっていたものをテープしていたが、そのテープを、今日は学生に聞いてもらった。次いで、きのくにで行なった、2人の子供と、教師のひろこに対する短いインタビューを聞いてもらった。学生のうち数人は眠そうであったが（もちろん、男子学生である。）ほとんどは関心を持ち、あとでコメントを書いてくれた。

10月25日

ホームー・レイン入門。3つの課題を設定していたが、2番目の課題が、わたしの期待以上に、（驚くほど）良い—あるいは少なくとも長い—議論になったので、3番目の課題は次週に持ち越すことにした。

少々長いレインの英文プロフィールをわたしと何人かの学生で読んだ。難しい用語は日本語で説明しておいた。その後、『親と教師に語る』

（文化書房博文社、1949 Talks to Parents and Teachers)のなかから、その話は「創造する」幸せと「所有する」幸せの違いについての話なのだが、うさぎと犬に関する小話を読んだ。学生に渡したこの2章分の小話は、日本語訳だったので、非常に早く読めた。その後、グループになって、日本語で、どのように感じたかを議論した。学生のほとんどはごく自然に、この話はニールの主張に非常に近いと思っていた。男子学生であるおさむと、友人のやすもりは、保守的な意見の持ち主であったが、子供にとって「拘束」は良いものだ、拘束に歯向かって行く過程そのものが子供を幸せに導くからだ、と考えていた。さらに彼らは、完全に自由な子供は何事もなしとげられない子供だと考えていた。容易に想定し得る反応ではあったが、ほんとうにがっかりした。おさむが帰宅途中の電車の中で、わたしのところへやって来て、自分の意見をさらに開陳した。かれは大人は子供よりも豊かな経験を持っているので、それゆえに子供に規則をつくってやる能力を持っているのだと言う。

授業中、まりがおもしろい問題提起をしたのだが、それは、この話のうさぎを追いかける「創造的に幸せ」な犬は、日本の学校では犠牲者を追い詰めるいじめっこと同じではないかというのであった。よい問題提起である。レインは自分の考えを十分に、あるいは論理的に、発展させなかったのではないかと思う。動物と人間とは分けて考える必要があるだろう、つまり犬は自分のいけにえを助けることはできないし、他の動物を追いかけることが純粋に幸せである。これに対して、人間は判断したり思索したりする能力を持っているので、明白に悪い事を行なうことで幸せにはなりえないのだと言っておいた。

堀に学生のコメント—かれのラジオインタビューと、わたしがきのくにの生徒とスタッフ

に対して行なったインタビューを聞いてもらった後で書いてもらった一をたくさん送った。堀は前のよりも良い、「授業は成功しているのではないのでしょうか。彼ら（あなたの学生）は教育や学校についての固定観念から解放されつつあるような感じです。」との返事があった。

11月8日

前回と同じパターンの授業。始めにレインに関するニールとデビッド・ウィルズの短い文章を4つ読んだ。学生が翻訳し、さらに事前に準備しておいた訳文を読んだ。この後、レインの『対話』（“Talks”）から一よりよく理解できるように、英語版と日本語版を学生に渡した。リトル・COMMONUELSについてのやや長い論述を読み、グループ・ディスカッションをした。（ある程度予想されたことだったが）おさむのグループはリトル・COMMONUELSの発想にはひどく反発した。多分、堀が考えようとしているようには学生を前進させていないのだ。というのは、おさむはなんと戸塚ヨットスクールでも（ここで、問答無用の管理によって4人の生徒が殺された。）、人間を良くするために考えられたレインの矯正施設と同じ程度には、上出来のものだと評価できると語ったのである!! さすがのわたしも、このような思いつきには言葉が出なかった。でも、自分の仕事は学生に意見を押しつけることではない。放っておけ。

授業のあと3人の学生—まゆら、まり、そしてとしこ—がやってきて、教育学科のある先生のところへ行かないかと言ってきたので、一緒に食事をした。次の日曜日、時間の都合がつく希望の学生と家でパーティーをすることに決定。用紙を廻して10人の学生がパーティーに出席することになった。今日は久しぶりにとしおが出席した。50%以上出席する必要がありますと書いた紙を渡したが、何の反応もなかった。

11月12日

家でパーティーをやった。11人の学生が来た。

数週間前に、きのくにに対して猛烈に皮肉をきかせ、批判をして、そのあと授業にはまったく出席しなかったはるおもやったきた。ずいぶん居心地が悪いようだった。いつもの女子学生たち—まゆら、まり、としこ、かおり、ゆき、それに加えて、おさむ、やすもり、かつみ、すすむ、はるおが来た。皆ずいぶん楽しんでいった。

11月15日

ホームー・レインについて3回目の、最後の授業。今回は、レインの考えの基本原則を要約したものと、レイン自身についての短い引用文を読んだ。続けてジェイソンと金時計の話を読んだ。（英語と日本語で。）自分自身でこの話を学ぶのが一番大切だと考えたので、今回は、学生がこの長い英語を読んで行くのに一切介入しなかった。そのあとグループ・ディスカッションをした。13人出席した。やすもりがいつものように遅刻して授業の半ばに現われた。かれはいつも機嫌良くにぎやかだ。おさむが、どういう訳か今日は来なかったので、ラディカルな考え方に対する強力な批判意見は出なかった。

11月22日

ニールの影響を受けたイギリスの2つの学校、サンズ校とキルクハニティー校に関する授業。学生に、サンズ校についてのデビッド・グリブルの英語を読んでもらい、そのあと日本語で、ジョン・エッケンヘッドのキルクハニティー校に関するやや長い文章を読んでもらった。この後、2年前に堀がキルクハニティーで撮った30分もののビデオを見て、最後にコメントを書いてもらった。2人の学生はビデオを上映している間中、断続的に眠っていた。（2人はもちろん男子学生である。）まりは、デューイの本をめぐって見ていたが、後でビデオはほとんど「子供が遊んでいる」シーンばかりで、まったく面白くないと言った。まゆらはキルクハニティー校はサマーヒル校とどこが違うのか考えていた。おさむはキルクハニティー校には、



(サマーヒル校のように) 授業はないのかと聞いてきた。わたしは両校には授業はないと言ってやった。ほとんどの学生がそうなのだが、彼も子供は机に座って学習するものなのだから、ここでは授業が行われていない、と思ったのだ。こういった新しい考えを、もちろん学生にとって理解できるように援助し、前へ進んでもらおうとするのだが、彼らは相変わらず、伝統的な学習についての考えから離陸することができず、このような反応を返してくるのである。

11月29日

ウイルヘルム・ライヒ。これからの2回の授業は「2人の重要な心理学者」(2人とも元心理学者であるが)、ライヒとアリス・ミラーを予定している。今日はわたしが作ったライヒのプロフィールを英語で読んで、そのあと日本語で2つ資料を読んだ。資料の1つは生命エネルギー (bio-energy) について説明したもので、もう1つはライヒとニールの関係に関するデニス・ホーナーの論文であった。このあと、グループディスカッションを行なった。さらに、『聴いて!!』(Listen Little Man!)の序文や、あらかじめ印刷物と一緒に渡しておいた風刺画や標語を見た。はかばかしい反応はなかった。1回の授業でライヒの全思想をつかむのは難しいことかもしれない。限定された意味で言うのだが、教育学よりも、もっと心理学をやった方が良いのかもしれない。いずれにしても、ニールと彼の「自己規律」(self-regulation)という考え方に対する影響という点でライヒは重要であり、同様に「自治」(self-goverment)という考え方ではレインが重要である。今まで、生命エネルギーといったようなものが本当に存在するのかという問題に、あえて答えを見つけ出そうと本格的に取り組んだ人はいなかった。たぶんわたしだってそうだ。最後に、ライヒ流の絵を書いて、それに見出しを付け、自分の大学生生活の指針にするか、あるいは人生訓にして

はどうかと言ってみた。この提案は、始めはちょっとした問題提起でありお遊びであったのだが、しかしほとんどの学生が熱中して絵を描き始めた。

面白いことに、学生は—おさむでさえ—レインなどよりずっと深刻な思想家であるのに、ライヒをすぐ受け入れたようであった。ライヒの仕事は科学的研究の装いを持っているのに、レインの仕事はお話風なものだからだろう。このことは、批判的精神の持ち主である日本人の場合にはいっそう強く当てはまるだろう。

12月6日

アリス・ミラーについての授業。広い意味で心理学と養育論に立脚している彼女の議論の、後者を中心に授業を組み立てた。導入としてミラーに関する『朝日新聞』の記事を読んでもらい、そしてミラーの本、『魂の殺人』(新日曜社 1983 For Your Own Good)から4つの引用部分を理解/翻訳してもらった。その引用のうち1つは、彼女の本の中から採っているのだがしかし、彼女自身の主張ではなく、ヒトラーの主張であった。学生はすぐそれが「異物」と気がついた。それから皆に、(今日は14人の学生が出席していた。)だれがそれを書いたのか明らかにするよう求めた。予想した通りの沈黙のあと、黒板に複数の選択肢を書いて学生に回答を促した。彼らは厳格な規律の必要を説いた引用文の筆者が誰であるか、5人の候補から選ぶことになった。5人とは、ジョン・デューイ、マーガレット・サッチャー、マライア・キャリー(アメリカの歌手で、今学生に最も人気があるとすでに教えていた。)、アブラハム・リンカーン、そしてアドルフ・ヒトラーである。12人の学生は正しくヒトラーを選んだのだが、2人の学生はサッチャーを選んだのである!! わたしも、たしかにそう間違いではないと思った。(そして、サッチャーを選んだ2人の学生は、なんと、わたしの授業で最も熱心に勉強し

ていた、まゆらとまりであった。)最後に学生に、子育てに関するミラーの基本的考えを伝えるやや長文の抜粋を英語か日本語で読むように言った。(全員が日本語で読んでいた。)おさむは、面目に掛けて日本語版を読んだ後、英語版を読もうとしていた。かくして、学生は、おさむを除いて総じてミラーに好意的なコメントを書いてきた。おさむはミラーの言うことは正しいと言っていたのだが、しかし、厳格な規律も「その存在が、規律を与える側と受ける側の両方から是認されるならば」、基本的には何も悪いことはないと言ってきた。

12月13日

本年最後の授業。学生に、日本の教育を批判し、さらに日本の教育とイギリスの教育を比較した『学校という交差点』の、わたしが執筆した1章分のコピーを渡した。学生に読んでもらい、議論し、コメントや質問を書いてもらうことにした。こういう作業をするのにはちょっと時間が不足だった。2人の学生が書いてくれただけだったが、それにはイギリスの初等教育について(多分、非常に自由なので驚いて)と、サマーヒル校に子供を入学させている日本人の親が、日曜日に子供を塾(試験のための詰め込み教育をする学校)にやっている、ということに対する驚きが書かれていた。まりは子供時代は将来の生活に対する準備の時期であってはないと書いた部分をあえて指摘してきた。(やはり、彼女はデューイを読んでいる。)しかし彼女は、「子供は、子供としての生活に永久に住み永らえることはできない。」とも考えている。彼女は、この点について、いずれうまく説明してわたしに書いてよこすと言っている。おさむは1つだけ質問をして、その後、わたしが渡した資料に何か長時間書き込み、マークをしていた。

1月10日にあと1回授業があるだけなので、その時には、宿題の論文を集めたいと言ってお

いた。これは日本で「レポート」と呼ばれている。最後の活動として、自分の観点で自分の主張を行うという条件をつけて、授業で学んだことを何でも良いから書くように、簡単に、多くてもせいぜい2ページ以内で、と言っておいた。

1月10日

あきれたことに、ほとんど全員の学生が、「レポート」を手にも、最後の授業に出席してきた。2人の学生は—としおとゆりこ—本当に珍しい、久しぶりの出席であったし、きくのに至っては去年の夏以来初めて出席した。色々聞いたが、彼女はこの長期にわたる欠席については、ついに理由を明らかにしなかった。2人の学生は(その1人がゆりこであったが)レポートをまだ完成していなかったので、住所を教え、送ってくるように言った。来るべきはずの学生が1人来なかったので、彼がレポートを提出するかどうか、じっと待っていなければならなかった。しかし本当に驚いたのは、こんなにたくさん学生のレポートを提出したことである。学生は出席によってではなく、レポートによって評価されることに慣れている。授業が終わったあと、数人、一緒にコーヒーを飲みに行こうとさそったので、近所の喫茶店に入った。

### 学生のレポート

学生は全員日本語でレポートを書いてきた。以下は彼らの書いたものを英語に翻訳したものである。説明不足の部分はイタリック(下線—訳者)で補っておいた。

としこ:

ニールとサマーヒルのことが強く印象に残っています。子供と一緒に話合おうことは良いことなので、ミーティングや自己統治の考え方に賛成です。日本では、規則はほとんどの場合子供を傷つけるようなもので、大人が作っ

たものです。子供はそれをただ守るように強制されています。私はとくに考えもなく大学に入りましたが、なぜ入試準備のために、こんなにつらい時間を過ごさねばならないのかといつも疑問に思っていました。一人一人の子供が大切にされなければならないというニールの考えは非常に重要ですが、この考えが日本に導入されるためには、革命にも値するほどの大変革が必要でしょう。個人としては、わたしは、どうして良いのかよく分かりません。

かおり：

ライヒと生命エネルギー。(彼女は、続けてライヒの生涯と生命エネルギーの概念について述べている。)「ガイア・シンフォニー」という映画を見ましたが、これは自然と人間、さらにその関係についての映画でした。本当に感動しました。まず、すべてが関連していて、人間はその一部に過ぎないということです。みな地球に誕生したものなのです。このことによって、わたしたちは自分の内部に生命というものを感ずることができるのです。人間は知恵を持ち、生活を改善することができます。自然と一緒にあるということを忘れていますが、われわれは自然のなかに生きているのです。すべて人は宇宙にあるのと同じ生命エネルギーを持っています。わたしたちはどうしてもっと楽しく、リラックスできないのでしょうか。そうできさえすれば、もっと良い人生が可能になるのに。この授業から、自由で、充実した人生の大切さを学びました。

ゆりこ：

最も印象深かったのは先生のパーソナリティでした。教育について、ことにサマーヒル校ときのくに子どもの村について学びました。2学期は病気をしてしまって、授業にあまり出られなかったのが残念です。

すすむ：

最も印象深かったのはきのくにです。(論文でもビデオでも。)子供の考えを尊重することは素晴らしいが、日本で実現するのは難しいと思う。先生の家でやったパーティーは楽しかった。

たみお：

きのくにとサマーヒルに特に関心を持った。サマーヒルのビデオには大変驚いた。始めのうち、彼らはどういうふうにして勉強ができるのか不思議だった。英語だったので余計分かりづらかった。小さな子供がタバコを吸っていた。次にきのくにのビデオを見たが、実生活から学習するというので、子供は何の科目も教えられていなかった。僕は始め、これではどうにもならないと思ったが、しばらくして子供たちが科目以上のことを学んでいるのを知って、大ショックを受けた。普通の学校よりも効用がある。一度、きのくにを訪れてみたい。

つよし：

サマーヒル校が一番おもしろかったです。日本でも、子供を尊重しようという議論はあるが、何も起こっていません。日本では、良い学校や大学に入るため、テストで良い点を取るよう期待され、点がとれなければその人の人生は失敗であると誰もが思いこんでいます—私も両親も同様です。私は浪人しました。(浪人とは、何度も大学入学を試み、そのため他の生徒たちよりもいっくらか年上になってしまうことをいう。)この経験のなかから、人には様々な生き方があることに気が付きました。時間をかけると様々なことが学べるのです。私は自分が何をしようとしているのか分かっているつもりですが、大学の友人たちはそうでもありません。毎日を楽しんで生きていくのは、将来を心配して

生きているより良いことです。これがサマーヒル校やきのくに子どもの村の良いところです。教育がこういうふうになれば、日本の国もすこしはよくなるでしょう。

きくの：

フリースクールについて多くのことを学びました。普通の学校よりも素晴らしいものだと思います。個性、自由、そして自立は大切なものです。私の通っていた高校の文化祭は生徒たちの手で運営されていて良かったのですが、でもこれすら、実際には大人が大半準備をしていました。経験から学ぶということは大変興味深く、また良いことであると思いました。机に座っているだけでは何も覚えられません。文部省がきのくに子どもの村を認可しているのには大変びっくりしました。第2次大戦後、実際に生活水準が上がっているのですから、日本の教育がすべて悪かったというわけでもないと思いますが、物質万能の教育に代えて、「心」の教育と言われる理由について、もっと考えてみる必要があるでしょう。

ゆき：

もっとも興味深かったのはきのくにでした。サマーヒル校にも驚きましたが、きのくに子どもの村にはもっと驚きました。ビデオはよかったです。—ビデオを見ることで多くのことを学びました。今後ゼミで、また自分の研究として、きのくにを勉強しようと思っています。きのくにで一番良かったのはプロジェクト学習でした。寄宿舎生活というのはちょっとどうかと思いますが、それは家庭学習は学校での学習と同様に大切であると思うからです。理想的な状態は、日本にきのくにと同じような学校がたくさんできて、子供が家から容易に通えるようになることでしょう。学校を卒業した後、子供は何であれ好きな仕事をすべきです。—すべての職業は

同じように大切であり、大学に進学するという事は考えていたほど重要なことではないことが分かりました。

あすか：

いままで学んできたニールとデューイの違いなどについて今、よく思い出せません。でも講義の半ば頃から、フリースクールについて学習することになったので、とても面白くなりました。フリースクールにも多くの問題があるに違いありません—例えば、家庭から離れて暮らさなければならぬとか、いじめなど。フリースクール内では、いじめはどのように解決されるのでしょうか。こういう問題を除いて考えればフリースクールは素晴らしいと思います。私は生徒時代に習ったことは、ほとんど全部忘れてしまいましたが、というのも入学試験を通るためだけに学んでいたからです。サマーヒル校やきのくに子どもの村のような学校がたくさん出来て、子供がもっと自由に家から通えるようになると良いのですが。

まゆら：

これまで知らなかった非常にたくさんのおもひや思想家について学んできましたが、ほんとうにどこまで分かっているのか、自信がありませんでした。でもしニールの『恐ろしい学校』(That Dreadful School)を読み終えてから、少しは分かったような気がしました。(この後、まゆらはこの本の思想について述べている。授業の半ばに、彼女に日本語訳のコピーを貸していた。) 私は子供があまり好きではありません。子供はある面では、冷たく残忍な性格を持っていると思います。ところでどうして人間を大人と子供に区別しないといけないのでしょうか。この授業ではまず、先生が学生の名前を覚えておられたのに驚かされました。こんなことはこれまでの大学生活ではなかったことです。先生

は学生のほうに向かって教壇に立っていたのではなく、学生とともに学んでおられました。

すすむ：

キルクハニティー校に強い関心を持った。戦争中に開校されたことに特に驚いた。日本では、政府は戦時中、すべてを国のため行うように導いていた。このような中でも、ジョン・エッケンヘッドはフリースクールを創設しようとした。彼は意志の人だと思った。この学校で行われていることにはとても感動した。行動によって学ぶという考え方は印象的であった。日本の学校では、生徒はイスに座って先生のいうことを聞き、黒板を写す。まったく工場労働と同じだ。こういう活動から子供はどれだけのことを学べるのだろうか。だから、行動することによって学ぶという考え方に賛成なのだ。日本の学校の発想はまず学べ、そのあとで実行せよである。こういうことになるのも、多分、日本人の性格に原因があるのだろう。なぜなら日本人は、何事も完璧に仕上げることに熱心で、そのため行動しつづ学ぶということができないのだ。行動からは多くのことが学べる。またその方が便利である。現代教育は子供に非常にたくさんの、どうでも良いことを教え込もうとしている。自分の生徒時代のことを振り返ってみると、いま社会でその知識がどれほど役に立っているか疑問である。どれだけのことができるのか疑わざるをえない。これは人々の個性を殺してしまうことであろう。個性がもっと尊重されるべきであろう。こういう社会を変えていくためにも、キルクハニティー校やきのくのような学校がどんどんできることが必要だ。

ひとし：

いろいろな国のいろいろな教育について学んできた。たくさんの方が驚きであった。自由を理念とした学校があって、それが素晴らしい

成果をあげたというのも驚きであった。というのも、こういう教育は僕が受けてきた教育とは正反対のものであったから。サマーヒル校のミーティングは大人と子供が一緒になって議論をしていて印象深かった。これは精神的な成長のために良いことです。もう一つ驚かされたことは子供たちは授業に行かなくても良いということであった。確かに、気が進まなければ何事も学ぶことができない。サマーヒルが長い間続いてきたことも驚きである。日本できのくにに子どもの村は成功するのだろうか。サマーヒルはきのくにのモデルであったが、きのくにはきのくにで自分たちの学校を創ったといえる。きのくにがサマーヒルの精神を受け継いで行ってほしいと思う。日本ではものごとを過激に変化させるという伝統がないから、人々によく理解されるまで、じっくりと待つのが良いのではないか。この授業を通して、この種の学校は貴重な学校だということが分かったが、日本でもきっといつかは成功すると思う。私は教師になりたいのできのくにを調べに行ってみたい。教師になったらこの授業で学んだように、すべての子どもを大切にしたい。

はるお：

はじめ、先生は我々に日本とほかの国の教育の違いを教えてくださいかと思った。実際、授業はA・S・ニールについてで、あまり面白くなかった。しかし、だんだん話が細かくなり、サマーヒルに及ぶようになると、ものすごく面白くなってきた。

日本で、もし学校が大人に管理されず、サマーヒルのように自由であったなら、先生はもっと色々話したり、意見を言ったでしょうね。子供のうちには成績が十分でなく高校に進学できない子もあるし、またなじめないために学校に行けない子供もいる。日本では高校を卒業していなければ成功できない。僕は大学1回生の

時、空き時間を使って家庭教師をしていた。中学2年生を教えていた。1人の生徒は高校に行けなかったが、それは簡単な数学の問題でも書いてやらないとできないからだった。勉強嫌いなのだと思い、高校へいくための目的意識を持たそうと思ったが、ちょっとした宿題を与えても取り組もうとせず、それ以上よくはならなかった。もし彼をもっと厳しく教え込んでいたなら、多分高校に行けたでしょう。高校へ行くことだけが良いことだとは思わないが、この生徒の前途は限定されたものになってしまうでしょう。子供にどこまで自由を与えるのかという問題は難しい。

サマーヒルでは、生徒は素晴らしい人間になれるかもしれない。しかし、テストに関しては必ずしもそうはならない。大学に入れたから僕も勉強することができた。大学に入る前はごく消極的な人間であったが、大学に入ってから、討論会や行事を組織するなど活発な人間に変わった。人と人との関係がいかに大切であるかを学んだのである。学校では誰もこの事を教えてくれなかった。教育は人格に関するものと学問的なものとの両方があると思う。子供たちには両方を教える必要がある。

さとる：

これまでサマーヒルのような学校生活があるとは思ってもみなかった。その生徒は学校の落伍者だと思っていた。しかし、それは間違いであった。サマーヒルのことについて少しふれてみたいと思う。自己統治：生徒たちは教室の外でなにかを話し合っている。彼らはいったん決めるとそれを民主的に実行する。あのよう物ごとを決めて行く所は、日本の学校ではどこにもないし、その動きもない。サマーヒルについて読んだ後、卒業生は現在どうしているのだろうかと思った。日本ではいったん何等かの形で落伍してしまうと、非常に限られた範囲のな

かからしか仕事を選べなくなる。しかしサマーヒル校の卒業生の場合はエリートと呼ばれる人と比べてみても信念を持っていて、ほかの人々が自分をどう思うだろうかなどは全く気にしない。彼らはサマーヒルの卒業生であることに誇りを持っている。前にも書いたのだが、サマーヒル校では子供たちが中心であり、大人によってストップがかけられるような提案もほとんどなかった。彼らがいかに自立し民主的であるかということを示している。この意味で、サマーヒルの生徒は日本の生徒よりも優れているように思う。日本では、ここ数年間個人主義について論じられ始めている。大学や企業が自立した人間を求め始め、そのための試験を試行している。この意味で、日本でもサマーヒルのような学校が出来る可能性がある。サマーヒルのような学校は世界で必要なのだ。

きょうすけ：

一番記憶に残ったのはきのくにだった。自分のすべき事は何であるか、自分で考えなければならぬ。だから子供は戸外で学習する。教室での学習はいつも例外的なことになる。きのくにには日本では大変特殊な学校であり驚きであった。

次にきのくにの良いところと悪いところを、評価するというよりも単に記述してみたい。一番良いところは、子供が本当に自由で発見学習を行っていることだ。この事はあまり反対ではないが、きのくにには、戦後すぐに試みられた実践を思い起こさせる。その実践は、人には生活しながら学ばなければならないたくさんの事があるのに、それを忘れて、子供、子供とばかり言って、こうして子供の学習を阻害した、という問題点を持っていた。子供を教える最も良い方法は、まずテキストから基本となるものを見つけ出すことだと思う。質問そして回答という形の学習方法を推薦したい。私にはきのくにの

ような学校が増えるとはほとんど信じられない。というのも、きのくにが他の学校に比べて優れた才能を持った生徒を育てるとは、どうしても思えないからだ。ただ、日本の教育制度があまりに学問的水準ということにとらわれすぎているので、きのくにのような学校があると、いくらかホッとするという点は良い。最後に理想の教育について述べておきたい。わたしは理想主義者でありたいのだが、考えはたいへん現実主義者であるから、どうしても教師指導型の授業を支持することになってしまう。それぞれの子供の自立を助けることはもちろん大切だと思うが、それも集団の中で行われるべきだろう。大事なことは、子供にやる気を起こさせることであり、そのために教師は1人1人の生徒にそれぞれ大切なことを与えてやる必要があるだろう。教師は生徒から距離を保つべきではない。側に立つべきである。いろいろな方法でこのことは可能になるだろうが、ともかく教師は生徒から学ばなければならない。

#### おさむ：

子供の個性を第一に考え、子供の思う通りのことができるサマーヒルの考え方について、先生と議論できる十分な理論的手段がありません。僕はこれまで、サマーヒルの考え方と日本の現在の教育システムを対比してきました。僕は先生に反対しようとして、たまには意地悪く発言しました。でも議論には勝てませんでした。しかし、このことは僕が先生に100%賛成することではありません。サマーヒルに出かけて自分の目で確認するまでは、同意できないことがいくつかあります。そこで頭のなかにあるいくつかのことを書こうと思います。

まず、サマーヒルでは子供は将来のための準備を行う必要がないと考えられています。大人たちは毎日現実の世界と向き合わねばならないし、子供の面倒を見ながら、よりよい生活を築

かねばならない。しかし、子供はそのようなことを考えなくてもよいわけで、子供は時として空想家になるわけです。この意味で大人が子供に、こういうことを考えたり、将来へ準備するように求めたりするのはとても自然なことのように思えるのです。

次に、人間は一人では生きていけず、常に何事か社会活動をしなければなりません。この事を考えるとき、人は集団の一員となって、社会に適應して行く以外にどうすることができるのでしょうか。人は集団のならわしに従う以外、どうすることができるのでしょうか。このことを否定するなら、人は集団から疎外されるでしょう。これではやって行けないではないですか。集団の外にあって、状況を変えようとするエネルギーはどこから湧いてくるのですか。古き良き時代のことしか考えられない老兵のようになってしまうだけです。

3点目に、この種の（サマーヒルのような）学校は子供にとって天国のようなものですが、親はその天国に子供を通わすため毎日働かねばなりません。毎日地獄-天国の反対の所で働くのです。つまり、大人は天国を守るため、また子供の生活のために地獄で働くのです。わたしはこの天国が何のためにあるのか分かりません。というのも子供もやがては親となり地獄へ行くことになるからです。天国にいったことのある人なら誰でも、地獄以外の仕事につきたいと思うでしょう。4点目は「良いこと」とは何かについてです。子供は何かを達成できないとき、それを成しとげようとして本心から怒るものです。もし子供が賢くふるまおうとするならば、努力して他の人々を納得させなければならないし、これこそが「良いこと」なのです。そしてこの反対は、子供がルールそのものを変更してしまおうとすることです。サマーヒルはすべてのルールを否定し、それについて議論さえしないような、悪いタイプの子供を作り出す

のではないかと思います。わたしは自由と気ままの区別がいまだに分かりません。どのようなタイプの人間がサマーヒルから産み出されるのかも分かりません。しかし、いつも思うのですが、教育者ほど教育に関して保守的である人もありませんし、その意味で、新しいことを試みようとしたニールを本当に尊敬するのです。

先生はよくビデオや本を見せてくれ、また集団討議をさせてくれました。教育にいろいろな方法を使われました。これは本当に楽しかったです。先生は僕たちに理解させるために、ずいぶん苦労されたと思いますが、それは、僕たちがいつも大人しくしているように、また他人と違わないようにと教わり続けてきた、その結果に苦労されたのだと思います。

ごろう：

これまで受けてきた授業では、先生は、ただ学生に知識を与えるだけでした。—もっといえば注入ばかりでした。今日では、もっと違うやり方でやって行こうとしているたくさんの学校があります。このことは、子供がどのようにすれば幸せになるかということを考えた結果だと思われるのです。ニールは、子供は基本的に良きものであると言いました。このことは非常に重要なことです。というのは、もしそのことが真実でないならば、子供の立場に立つという考えはその時完全に吹き飛んでしまうからです。ニールは、子供を学校に合わせるのではなく、学校を子供に合わせるのだといつも主張していました。ニールは完全に子供のそばに立っていましたから、この表現は大好きでした。この子供中心主義の考えはサマーヒルに深く根づいていましたから、子供はここでは恐れるという事を知らず、また緊張もありませんでした。彼らは、両親や教師からもたらされるコンプレックスからも自由でした。僕が、恐怖感から自由になるということについて考えていた時、ヌード

で日光浴するビデオを紹介され、驚いてしまいました。子供はここでは精神的に解放されているのを知ったのです。ニールは子供をもっと自由にしてやるため、コンプレックスを取り払おうとしました。僕は中学校や高校でそれを経験し、小さな事でも意気消沈していましたので、ニールの考えがとてもしばらしく思えたのです。

その他にも良いところがありますが、それはサマーヒルのミーティングです。これは他の学校では聞いたこともありません。自己統治も、ニールが言ったように本当に価値のあることです。デモクラシーの世の中で生きていくためには、この経験が重要なのです。そのほかの大事なポイントは、子供と教師が同等の権利を持っているという主張です。このことは、子供が人間個人として尊重されなければならないということの意味しています。そのほかに驚いたことは、サマーヒルでは、もし子供が望まないのであれば授業に行く必要はないということでした。しかし、もし子供がだれも授業にいかなかったら、どういうことになるのでしょうか。また子供は基礎的な専門知識をどうして獲得するのでしょうか。なぜなら、人間にとって重要なことの一つは学習するということですから。また他方で登校拒否のことについて考えてみると、授業に出るためのプレッシャーが全くなくなるわけですから、かれらはサマーヒル校にも存在しないということになります。サマーヒルのような学校が日本でも増えていくことを望みますが、もちろんそれは非常に難しいことです。やはり、教育の中心はまだ試験準備です。もし何かを変えようとするのでしたら、僕たちは、まず重大事である入学試験というものから変えていかなければならないでしょう。

こうへい：

非常にたくさんのお話を学びました。最も印象的なのはきのくにでした。わたしは普通の学



校へ行きましたから、きのくにはとても驚きでした。きのくにのプロジェクト学習は普通の学校の授業にあたるものですが、もちろんこのプロジェクトには宿題はありませんし、ここではだれも授業に行くように強制されません。このことにも大変驚きました。ほかの学校に比べて子供は生き生きとしていて、幸せなのだろうなと思いました。しかし1つ疑問が湧いて来ました。それは、おそらく普通の学校の子供はきのくにの子供より、たくさん知識を持っているのではないかということでした。でも、子供はたくさんを知っていないくはプロジェクト活動をするにはできないし、また子供はいつもプロジェクトをやりながら、物事を学習していくのだということが分かりました。ひょっとしたら、年下の子供ですら事によっては、普通の学校の年上の子どもさえ知らないような事を知っているということもあるでしょう。きのくにの子どもと普通の学校の子どもの間には、そんなに大きなギャップがないのかも知れません。きのくにのミーティングは良いものだと思います。こんな学校が日本にもあるということに非常に驚きました。きのくには進むべき1つの道を示していると思います。

#### としお：

ニールが最も影響を受けたホーマー・レインは、イギリスでリトル・コモンウエルスを創った。リトル・コモンウエルスは問題児のため施設だと認識されていた。しかし、レインは、驚くべきことに自分1人でこれを経営し続けた。ニールはレインから、子供の傍に立つという考えを学んだ。リトル・コモンウエルスの子供たちはレインのフィーリングが分かっていたのだと思う。僕は、以前は子供といったって半分は大人で、十分成長していないだけではないか、だから管理する大人が必要なのだと考え、子供の自立には疑いの念を持っていた。さらに、も

し大人の言うことをきかなかつたら、子供はいい大人にはなれないとすら考えていた。しかし、コモン・ウエルスのことを知って以来、子供は大人が規則を与えなくても、十分に成長するものだということを理解した。子供が半分大人だという考えは、大人の立場からみた、たいへん保守的で利己主義的な考えだ。勉強がまず最初という日本の学校教育では、子供は子供同士で結びついたり、あるいは社会や個性などについて全く学ばないままのように感じる。どれだけの教師や大人が、子供を完全に信頼しているといえるのだろうか。しばしば子供をアクセサリのように扱っているのを目にする。こんな社会に生きていかなければならないのには失望を感じてしまう。

#### やすもり：

この授業では異なった種類のいくつかの学校について学んだ。日本の普通の学校とは全く違った学校であった。（きのくに子ども村は別）これらの学校では子供にとって自由や個性が最も大切なものとされていた。こういう学校があること自体、教育とはいかにあるべきか人々に考えさせることになる。わたしが育ってきた学校は規則づくめで、子供と大人の関係も対等ではなかった。以下に、いくつか問題提起をしておきたい。

まず第1に、何か問題がもち上がったとき、子供は常に最善の方法で問題解決できるのだろうか。2番目に、民主的に投票という方法でものごとを決定するとき、少数者の扱いはどうなっているのだろうか。こういう二つのことを考えていた。しかし、サマーヒルのような学校が70年以上も続いてきたことはすばらしいことだ。学校を存続させるためには、おそらく多くの問題があったことだと思う。きのくにも人々が受け入れてくれるまでは、おそらく困難な時期を過ごすことになるだろう。というのも依然

としてほとんど人が、現行の教育システムに賛成しているからである。子供の進学に、とてつもなく大きな関心を払う人々が、まだまだ多い。

一ついえることは、きのくに子どもの村は、受け入れられようが受け入れられまいが、そんなことには関係なく、教育に一石を投げ掛けているということである。この授業で学んだ新しいタイプの学校によって、学校に関するイメージが変わったし、教育に関する考え方も変わった。

二人の学生がレポートを書かなかった。まゆらは単位を必要とせず、教育に対する関心からこの授業に参加したものであり、提出は義務ではなかった。かつみはレポートを提出しなかった。

## あとがき

この授業では、わたしはニール、ついでデューイを紹介することから始めた。こういうやり方をしたのは、必ずしもはっきりと意識していたわけではないが、最近日本で、堀真一郎の手になるきのくに子どもの村の実験のなかで「わたしはこの学校を継続的に研究して来た」、両者の考えが、感情的な側面においても、知的な側面においても、結びつけて考えられてきているということに、主たる理由がある。この作業は、学期全体の半分強続いた。この後の作業は、もう二つ、イギリスの学校—サンズ校とキルクハニティー校—について勉強し、さらに、ホーマー・レイン、ウイヘルム・ライヒ、アリス・ミラーの著述を読んでいくことであった。時間が足りなくなって、カバーしようとしたことのいくつかは、やり残してしましたが、それでも、この一年は、わたしにとっても学習する一年間であった。

ほとんどの学生は、一般化していえば、この

授業で三段階の変化を示したように思われる。初め学生は、この教育に対してかたくなな態度をとらず、ことに男子学生は、「抵抗」という考え方に共感を示したように思われる。しかし、授業のなかで遭遇する多くの原理がラディカルな本質を持っていることを学ぶにつれ、かれらはだんだん用心深く、そして保守的になっていった。そして最後には、ほとんどの学生が、最初に学んだときにはびっくりしてショックすら受けていたサマーヒル校やきのくにの子ども村などに対して、肯定的に評価することを避けようとするようになった。教育における自由の価値について初めから懐疑的であったノリの態度は、例外的なものであった。（これはどうしても言っておかなければならないことであるが、おさむはわたしの考えとは全く異なった見解の持ち主であったにもかかわらず、授業には全部出席するというまじめな学生であったし、また授業でも非常に大切な学生であった。）

しかしながら、ほとんどの学生にとってまったく新しいこれらの思想が、表面的にでも受け入れられるということは、人間の基本的な態度はそう変わるものではないのだから、注意深く評価されるべきことであろう。「学習」を組織する、という思想を理解するのは、彼らにとっては至難の業であった。これは、日本の学校では詰め込み学習、記憶、情報収集ということが過度に強調されているので、そういった学校経験から自立することがきわめて困難である、ということからもたらされている。数カ月の期間にまたがった22回の講義では、（ことに、しばしば授業が飛び飛びになってしまうような場合もある。）学生に対して、教育についての異なった考えがあることを、ほんの少し示す以上のことはほとんどできなかった。それに、この授業の目的は学生にわたしの考えを押しつけることではなく、知的に、教育についてのこういった思想について、考えてもらうことにあっ

た。全体として、学生の反応が積極的になったということは、教育におけるオルタナティブな立場を目指す者にとって、勇気づけられることがらであった。

ずるけ休みや、授業中にしばしば眠りこけているといった例は、日本の高等教育にあってはそう例外的なことではないし、またずるけ休みをしたり眠ったりしたことで、そんなに厳しい取り扱いを受けるわけでもない、というのが日本の高等教育である。興味深かったのは、男性と女性との間の分離ということである。男性と女性は授業で別々に座っているだけでなく、提示した考え方に対しても反応の仕方が全く違っていた。少数の例外を別にすれば、女性は進歩主義の考え方やラディカルな考え方に対して、男性よりも大きな関心を示し受容的であった。女性は物ごとを広い視野の中で位置づけようとしていたし、また学校や社会に対してもかなり批判的であった。部分的な説明が許されるならば、女性は、今だに男性支配の日本にあって、「成功する」ということに対してあまり大きなプ

レッシャーを受けていないので、物ごとを客観的に評価することができるのだろう。これに対して男性は、成功することへの、また現状を受け入れることへの、厳しいプレッシャーにさらされているので、自分がその中でうまくやろうとしている社会を変えようなどとは、思いたくないのであろう。

#### 授業で使用した図書

- Dewey, John. *Experience and Education*. 1938. New York: Collier Books, 1963.
- Lane, Homer. *Talks to Parents and Teachers*. London: Allen and Unwin, 1928.
- Miller, Alice. *For Your Own Good: The Roots of Violence in Childrearing*. British edition. London: Virago Press, 1987.
- Neill, A. S. *The New Summerhill*. Ed. Albert Lamb. Harmondsworth: Penguin, 1992.
- Reich, Wilhelm. *Listen, Little Man!* Harmondsworth: Pelican, 1975.